

## 生活文化企業の大成者

さ じ      けいぞう  
佐治   敬三 (1919-1999)

サントリーほか



『佐治敬三追想録』

より

### § 人物データファイル

#### 出生

大正8年(1919)11月1日、大阪市東区住吉町に、父鳥井信治郎、母クニの次男として生まれる。兄吉太郎とは11歳離れていた。父信治郎は40歳。彼が創始した「<sup>ことぶきや</sup>壽屋洋酒店」はこの年、人気の甘口赤葡萄酒「赤玉ポートワイン」の増産体制に着手している。

#### 生い立ち

大正12年(1923)大阪の郊外、雲雀丘に転居。この年に弟の道夫が生まれている。たくましい野生児を育む野外型幼稚園「雲雀丘・家なき幼稚園」を経て、大阪府立池田師範学校附属小学校に入学。腕白坊主だった半面虚弱体質で、学校を欠席することも多かった。昭和7年(1932)難関校の浪速高等学校尋常科に入学。この頃母方の親戚筋の佐治家の養子となり佐治姓を名乗るが、そのまま鳥井の家で育つ。翌年母クニ死去。次の年(尋常科3年生)の夏、肺浸潤で倒れ留年。この失意の時期、恩師・佐谷正との出会いと下村湖人の『次郎物語』を始めとする多数の読書により、人生の自覚が芽生える。浪速高等学校高等科理科乙類を経て、昭和15年(1940)父の勧めもあり大阪帝国大学理学部化学科に進学。小谷無二雄門下でアミノ酸の合成をテーマに研究に没頭する。この年、兄で壽屋取締役副社長の鳥井吉太郎が死去。昭和17年(1942)大阪帝国大学理学部化学科を繰り上げ卒業し、海軍技術将校として任官。中国山東省の青島での訓練を経て、神奈川県大船の第一海軍燃料廠梅村研究室に勤務。燃料・潤滑油の研究を任務としていた。昭和20年(1945)9月復員し大阪に帰る。

## 実業家時代

昭和20年（1945）10月壽屋に入社。翌年2月、後にサントリー生物有機化学研究所（現・サントリー生命科学財団）へと発展する財団法人食品化学研究所を設立する。同年4月、新生「トリスウイスキー」発売。昭和24年（1949）専務取締役役に就任。昭和25年（1950）東京池袋の久間瀬巳之助くませみのすけの発案により最初のトリスバーを誕生させる。このトリスバーはその後全国津々浦々に広がっていった。昭和26年（1951）ラジオの民間放送が開設されると率先して参加。クラシック音楽番組「百万人の音楽」を提供する。その後も山本安英の語りによる「次郎物語」、テレビの最初の提供番組「今日と明日のお天気」、昭和34年（1959）には西部劇「ローハイド」の単独提供と続いていく。この主題歌はその後パーティーでの敬三の十八番となる。優れた広告を作る重要性を認識していた敬三にとって強力な壽屋宣伝部の復活は課題のひとつであり、「トリス」や「赤玉」を中心に新聞広告、雑誌広告を精力的に発していたが、昭和31年（1956）4月にはチェーンバーの顧客向けPR誌『洋酒天国』の創刊号が発行されている。初代編集長は後の芥川賞作家開高健かいこうたけし、2代目は山口瞳でのちに直木賞作家となった。トリス広告文化時代の幕開けである。昭和33年（1958）には柳原良平の描くキャラクター「アングルトリス」がデビュー。十数年にわたってテレビ、新聞、雑誌で活躍し、ウイスキーといえばアングルトリスと言われるほどだった。敬三は昭和34年（1959）5月にウィーンで開かれたヨーロッパ国際広告会議に夫妻で出席している。

昭和36年（1961）5月末、社長に就任。同年9月にビール事業進出を正式発表。直ちにビールを造り売るための指針を求めて、自ら数名の技術者を伴いドイツを中心に欧州のビール銘醸地を軒並み回り、現地で「クリーン&マイルド」なデンマークのビールを導入することを決断。即刻ヨルゲンセン研究所に技術提携の申し入れをしている。昭和37年、販売ルート確保のため朝日麦酒との提携を共同発表。昭和38年（1963）3月、社名を「株式会社壽屋」から「サントリー株式会社」に変更し、全てのブランドを「サントリー」に統一。広報室を設置し企業の情報を社会に広く提供す

る体制を整えるなど、事業の発展とともに会社組織も様々に改編している。同年4月「サントリービール」新発売。樽の生への評価は高かったが、熱処理した瓶ビールは苦戦。1年後の昭和39年、技術陣の努力により生ビールを加熱処理せずそのまま瓶に詰めた「びん生」が誕生。さらに昭和42年（1967）4月、米国の宇宙開発から生まれた新技術マイクロフィルターの導入により、家庭向け生ビール市場を切り開く瓶詰め生ビール「純生」<sup>じゆんなま</sup>が開発・発売された。

このビール事業に象徴されるように敬三は、父から受け継いだ、新しい飲酒文化を創造しそれに伴う需要を開発しようとする「やってみなはれ」精神を一貫して発動し続けており、昭和33年（1958）には本格的ワインとして「ヘルメス・デリカワイン」を発売。昭和47年には「金曜日はワインを買う日」のキャンペーンを試みている。当時の市場のなかでは正に存在しない需要への挑戦であったが、金曜日という日に着目し、合理的な社会分析により週休2日と女性の地位向上という時代の流れを巧みに捉えたという点で、マーケティングの分野でも先駆者であった。

1970年代末から80年代初めになると「超酒類企業への脱皮」を図り、清涼飲料を初めとする食品事業、世界の酒造会社と提携した洋酒輸入事業、国内外に展開するレストラン事業、米国のペプコム社の買収や中国でのビール会社の設立、山梨ワイナリーからフランス・ボルドーの「シャトー・ラグランジュ」にいたる葡萄園と醸造所の経営、青いバラに代表される新種花卉の開発など、サントリーグループとしての成長を目指した。またそれと並行して、原点というべきウイスキーでも新しいブランドが加わり味の上でも不断の品質向上が図られている。平成2年（1990）会長に就任。甥鳥井信一郎が社長に就任した。

## 社会・文化貢献

サントリーは父信治郎の時代から「利益三分主義」を掲げ、社会・文化・スポーツなどの分野に活動領域を広げ、組織内で暗黙のうちに共有される価値観に磨きをかけ内部蓄積してきた。また自らの位置付けを「生活文化企業」と定め、豊かでゆとりのある生活を実現する企業活動を目指し、

独自の企業文化を築きあげている。

昭和36年（1961）創業60周年を記念し「生活の中の美」をコンセプトに「サントリー美術館」を開設。館長に就任。70周年の昭和44年（1969）鳥井音楽財団（現・サントリー音楽財団）を設立し理事長就任。財団の活動の一つ、サントリー音楽賞は、ジャンルを問わず我が国の洋楽の発展に貢献した日本人に贈られる賞で、岩城宏之、武満徹<sup>たけみつとおる</sup>などが受賞している。創業80周年の昭和54年（1979）人文科学や社会科学を対象とし、日本と世界の学術文化の発展への寄与を目的としたサントリー文化財団を設立、理事長に就任。「地域文化賞」「学芸賞」を創設。役員には梅棹忠夫、開高健、山崎正和などが就任し、幅広い活動を展開している。昭和61年（1986）にはヘルベルト・フォン・カラヤンの協力で、ヴィンヤード型クラシック専用ホール「サントリーホール」を開設。館長に就任している。さらに平成6年（1994）創業90周年記念事業として、大阪にサントリーミュージアム「天保山」を開設（平成22年12月に閉館）。

昭和45年（1970）大阪・千里丘陵で開幕した「日本万国博覧会」に酒類業界として唯一単独で出展を決め、これ以後国内で開かれる国際博、地方博にも積極的に出展し世界企業としての情報を発信していった。これら博覧会への出展テーマに共通するのは、環境への配慮、自然と人とのかかわりを取り上げていたことである。

各種団体の役職も昭和29年（1954）の大阪青年会議所理事長就任を手始めに関西経済同友会代表幹事等、数々の監事・理事長・委員長を歴任している。

## 晩年

社業半分、プライベート半分の生活に入り、余暇には多彩な趣味を楽しみ好きな読書に耽る。平成2年（1990）には念願のヒマラヤ行きを果たし、高度6000メートルの機上からエベレストを撮影。平成6年（1994）日本経済新聞社より自伝『へんこつなんこつ』発刊。平成7年（1995）には第1句集『自然薯』を、平成10年（1998）には第2句集『仙翁花』<sup>せんのおうげ</sup>を発刊している。平成11年（1999）4月、創業100周年記念式典（大坂城ホール）に

出席し全社員を激励。同年11月3日没。大阪・北御堂にて通夜・密葬。12月2日サントリーホールで社葬。享年80歳。なお、死去に伴い正三位旭日大綬章を贈られている。また生前には、文化交流・文化貢献によりポルトガル、フランス、ドイツ、オーストリア、メキシコ、イタリア、オランダなどの各国からもそれぞれの勲章を授与されている。

## 関係人物

**鳥井信治郎** サントリーの前身「壽屋」の創始者。明治12年（1879）生。「日本のウイスキーの父」と呼ばれる。明治32年（1899）大阪で「鳥井商店」を開業し葡萄酒の製造販売を始める。洋酒の伝統の全くなかった時代の日本において「外国品に負けない洋酒を、日本の土地に、日本人の手で育て上げていこう」というパイオニア精神のもと「赤玉ポートワイン」の創造や国産ウイスキーの製造に情熱を傾けたことが、戦後のサントリー発展の基礎となったといえる。ウイスキーの天才ブレンダーとしても有名。

**開高健** 昭和5年（1930）大阪生れ。昭和28年（1953）大阪市立大学法学部卒業。偶然の事情から当時の壽屋宣伝部に入社。イラストレーター柳原良平と組んでトリスウイスキーの広告を担当し、「トリス時代」の旗手となった。又、PR誌『洋酒天国』を興し終刊するまで同誌の編集兼発行人を務める。昭和32年（1957）『裸の王様』で第38回芥川賞受賞。昭和37年、社長佐治敬三とヨーロッパ各国のビールを飲み歩き、サントリービール発売前後の広告（コピー）を担当。昭和39年（1964）「株式会社サン・アド」設立に参加し、取締役となっている。同年末、『週刊朝日』特派記者として戦乱のベトナムに赴き、九死に一生を得た。その体験は『ベトナム戦記』『輝ける闇』に結実し、昭和43年（1968）『輝ける闇』で毎日出版文化賞を受賞。熱心な釣師としても知られ、世界中に釣行し、釣りをテーマにした作品も多い。平成元年（1989）食道腫瘍に肺炎を併発し58歳で没。墓所は鎌倉・円覚寺塔中、松嶺院。神奈川県茅ヶ崎市に開高健記念館が開設されている。

**山口瞳** 大正15年（1940）東京生れ。旧制第一早稲田高等学院中退。昭

和21年（1946）鎌倉アカデミアに入学。19歳の時から編集者生活に入り、昭和32年（1957）まで出版ジャーナリズムの中にあつて本づくりの機微に通じる。この間に国学院大学を卒業。昭和33年（1958）開高健の推薦で壽屋に入社しPR誌『洋酒天国』の編集に当たる。また、新聞・雑誌広告、テレビコマーシャルの制作にも才腕を振るい、特に浪花節をモチーフとしたヘルメスジンのコマーシャルなどは「必要悪であつたコマーシャルを見る価値のあるものに高めた」と社会学者をうならせる大ヒット作となつた。「トリスを飲んでハワイに行こう」のキャッチフレーズは当時の流行語となる。昭和38年（1963）『江分利満氏の優雅な生活』で第48回直木賞受賞。昭和39年「株式会社サン・アド」取締役となる。昭和38年（1963）から死去まで31年間一度も穴をあけることなく『週刊新潮』に連載したコラム「男性自身」が代表作。山口の著書の表紙絵・挿絵はそのほとんどをサントリー時代からの友人である柳原良平が担当している。競馬・将棋・野球についても造詣が深く、『草競馬流浪記』『山口瞳血涙十番勝負』『草野球必勝法』などの著書もある。かつては「大日本酒乱之会会員」を自称していたこともあつた。平成7年（1995）肺がんの悪化により67歳で没。

**久間瀬巳之助** 昭和25年（1950）トリスバーの第1号店「どん底」を東京池袋で開店した人物。佐治敬三は自伝『へんこつなんこつ 私の履歴書』のなかで、「昭和25年のこと、東京池袋の久間瀬巳之助さんから一つの貴重なご提案をいただいた。『私はスタンドバーをやりたい。しかもトリスハイボール1本。おつまみも塩まめだけ。均一価格70円』という画期的な試みであつた。ウイスキーを純粹に楽しんでいただく、当時の日本にはなかつた素晴らしい発想であつた。早速『もろ手を挙げて賛成です。どんなお手伝いでもいたしますから』。これが戦後史を飾るトリス時代の幕開けだったのである」と書いている。

## 神奈川との関わり

昭和17年（1942）大船の第一海軍燃料廠に海軍技術士官として勤務。終戦まで鎌倉に在住。

## § 文献案内

### 著作

- 『洋酒天国 世界の酒の探訪記』佐治敬三著 文藝春秋新社 1960 〈Y、K〉  
『新洋酒天国 世界の酒の旅』佐治敬三著 文藝春秋 1975 〈Y、K〉  
『へんこつなんこつ 私の履歴書』佐治敬三著 日本経済新聞社 1994 〈K〉  
『自然薯 佐治玄鳥<sup>げんちよう</sup>句集』佐治玄鳥著 角川書店 1995 〈未所蔵〉  
『仙翁花 佐治玄鳥句集』佐治玄鳥著 朝日新聞社 1998 〈未所蔵〉

### 社史

- 『サントリーのすべて（企業の現代史40）』 フジ・インターナショナル・コンサルタント出版部 1965 〈K〉  
『サントリーの70年』サン・アド編 サントリー 1969 〈Y、K〉  
「Ⅰ やってみなはれ」「Ⅱ みとくんははれ」の2冊組。  
『日々に新たに サントリー百年誌』 サントリー 1999 〈K〉  
壽屋からサントリーへの疾風怒涛の100年を記録にとどめ、そこに流れる精神を次代の社員に引き継ぐのを目的として編纂されており、特に若い人向けに101のテーマで展開し、ビジュアルで読みやすい、目で知るサントリーの100年史となっている。

### 伝記文献

- 『新しきこと面白きこと サントリー・佐治敬三伝』廣澤昌著 文藝春秋 2006 〈Y、K〉  
本稿・人物データファイルの主体典拠。  
『佐治敬三 挑戦の哲学』海藤守著 PHP 研究所 1983 〈K〉  
『おもろいやないか 佐治敬三とサントリー文化』片山修著 集英社 2000 〈K〉  
『佐治敬三追想録』 サントリー 2000 〈K〉

<佐久間ひろみ>